

より良い学校生活のために

3年1組14番 高畑鈴
3年4組19番 辻本花奈
3年4組35番 森川陽菜
3年5組14番 梶原恋乃

Keywords:「異文化」「マップ」「グローバル」「留学生」「共生」

グローバル化が当たり前の今では、誰でも国際的な交流をできる時代である。だからこそ誰もが、文化の違いを感じた事がある。そこで私たちは文化の違いについて興味を持ち、さまざまな国の文化などを探究する事にした。コロナが世界的に流行する中で、実際に私たち自ら海外へ行くことは厳しかったため、国内で出来る限りの探求を行った。2年生のスタディーツアーで、北陸方面に行ったので、その時に行った、福井県国際交流会館を訪れた際に、話を聞いたり資料を見たりして、在日外国人の方々が文化の違いによって困っていることを、学んだ。それと同時に、外国人だけでなく私たちの日本国内での文化の違いも、探求できる機会と思い、北陸と関西を比較して、地方の文化の違いも調べたが、距離が近いということもあり、実際に自分達を感じることはなく、北陸の方々に話を伺った際にも、「わからない。」「あんまりない。」などの声が上がった。スタディーツアーを終えた私たちは、本格的に探求することに絞って、在日外国人の困ったことや、問題点を解決しようと探求を進めることに決断した。実際に国際高校に来ていた、留学生や、国際高校に勤めている外国人の先生などに、話を聞いた。

調べるにあたって私たちが思う異文化理解は何なのか話し合った。ある1人は他の国の文化を知り、その国の人にあつたときに引いたりせずにするを言った。また別の1人は異文化を知ることは大切だが、もし自国と違いすぎる考えや行動であれば無理して理解する必要はないと言っていた。それ以外にも海外起点の文化が日本に流通していることは多く、それらは日本にいい影響を与えているという意見もあった。このことから個人個人で異文化理解に対して思っていることや考えていることには違いがあることが分かり、他国の文化を全員に理解してもらうのは非常に難しいのではないかと考えた。対象とする範囲を狭くすればその中の人たちで理解するのはまだ可能なのではないかと考え、身近で小さな集団である学校を対象とすることを決めた。学校内での文化の違いを理解できる所といえば、留学生と在校生の生まれた国の文化の違いだと考えた。留学生にとって学校内の文化の違いはどこに現れているのかを調べるために現在在学している、又はしていた留学生5人にインタビューをした。その結果、学校周辺にある建物が何か分からないや書道室や茶道室など自分の国の学校にない教室が多くあって何に使うのか、どんな作りになっているのかが分からないがとても興味があり行ってみたいという意見が多くあった。なぜ教室の質問が多いのかと考えると、学校内にマップがないことに気づいた。校内マップを作って校内やホームページ貼ったり、留学生がきた初日に渡すことでこの悩みが解決され、文化を理解してもらいやすくなるのではないかと考えた。そこで校内マップを作るべきか、もし作るのならばどのような情報が欲しいかをグループで話し合ったあと、3年生全員と海外出身の先生と留学生にアンケートをとった。

【文化の違いで生じるのは良いことであるのか】

猛威をふるったコロナウイルスが落ち着き、訪日客、または日本への出稼ぎ人口が増え、「異文化理解」という言葉だけでなく、「文化衝突」という言葉も世の中に定着しつつある今、どうしても文化の違いが生じること、異文化を体験することにはメリットとデメリットの両方が挙げられるだろう。2000年の沖縄で開かれた先進国首脳会議では初めて文化の話題が議題としてあがった。文化の多様性について会議の中では「文化の多様性は、創造性をかきたて、革新を刺激するた

め、21世紀の人間生活を豊かにする可能性を有する社会的及び経済的な活力の源泉である」と宣言した。また私たちがタイとの交流を通し分かったこととして、訪日したタイの学生たちは、異文化に触れるたびに楽しめるようになり、来日してすぐに日本の異文化に適応できるようになったということである。そして日本で文化体験談を自国に帰って話しており、日本で異文化体験を満喫してくれていた。

しかし一方で、異文化体験がデメリットを生むこともある。昨年10月にスタディーツアーで私たちが訪れた福井県国際交流会館では日本に住む外国人への相談を受けており、私たちは交流会館が受ける相談の内容の一部聞かせてもらった。相談内容の多くは、「日本語の学習」「仕事に関して」「コロナのワクチン」について。例としてあがったのが、出稼ぎのために日本に来た海外で育った両親からすると、日本の義務教育を終えた子どもには高校には進学をさせず、生活をするためのお金を貯めるため今すぐ働いて欲しいという相談を受けるが、会館側は子供たちの将来のため、日本でこれから暮らしていくために考えると高校を卒業していることが日本社会では重要視される、と伝えざるを得ないことが挙げられた。また福井県が作成した福井県多文化共生推進プラン[概要版]の令和2年10月福井県内に居住する満18歳以上の外国人住民に行ったアンケートからは、生活上困っていることとして「日本語の勉強」が最も多く挙げられた。

【少しでも過ごしやすい学校生活に】

私たちは次にメリット、デメリットを知った上で、私たち高校生ができることはないのかと考え、文化の違いを感じる機会が多い留学生にとっての過ごしやすい学校生活を作るための取り組みを行うことにした。そこで私たちの身近にいる校内の留学生は文化の違いをどの場面を感じているのか留学生6人に調査を行うことにした。アンケートの結果、「決まった時間にお祈り、手足を洗うなどの文化があるイスラム教を信仰している生徒が、お祈りをする場所、自分の手足を洗える場所がない」という意見や「書道や音楽、クラスの移動の時に教室の位置が分かりにくい」などの意見がだされた。私たちが高校二年生になった際にイスラム教を信仰している留学生と交流をしている中で、お祈りをするために即席で作られた部屋に移動していたり、次の授業のために移動しなくてはならないが教室がわからず、よく聞かれることもあった。これらのさまざまな意見がある中、私たちにも当てはまることとして、教室の位置、また、それが、何をするための教室なのかわからないという意見を解決することに焦点を当てることにした。実際私たちも新学期が始まり、イレギュラーな移動教室があった際にはなかなか教室の場所がわからないことが何度かあったのだ。この意見を踏まえたうえで私たちは校内マップを作成することにした。最初に学校内のマップを作成した。その後私たちの知らない教室を挙げ、それらの教室の中と外から写真をiPadで撮影した。そして国際高校の生徒にも、留学生にとっても役に立つマップを作成するにあたり、私たちは普通のマップとは違う工夫を凝らすことにした。一つ目は、やはり留学生にとってわかりやすいマップを作ることが第一であると考え英語表記にすることである。国土交通省観光庁が2017年2月に発表した訪日外国人旅行者に向けてのアンケート調査によると、日本での旅行において、観光案内板や地図の多言語表示の少なさ、わかりにくさが多く挙げられた。二つ目に、留学生があまり入ることのない教室の中の画像と、それらの教室はどの授業、活動で使うのかを示したPDFを作り、マップに載ってあるQRコードを読むことにより見られるようにしたことである。私たちが入ったことのある教室では、実際に使っている学生だからこその意見を入れられるように意識した。三つ目は、一階から三階までのマップが全て入って一枚の紙に刷られているものだと見にくいと感じ、マップを1階ごとに分けたことである。マップの作成後、私たちは校内の五箇所に張り出し、マップの横にアンケートを貼り、答えてもらうよう促した。アンケート結果よりマップの良い点として「英語表記であること」を挙げてもらった。しかし、「そもそもマップがあるのに気が付かなかった」「もう少しマップをいろんなところに貼ってほしい」という意見も同時に得られた。またアンケートに回答する生徒が少ない点からも、もう少し色んな人に知ってもらう工夫が必要であると感じた。ただ張り出すだけでなく、学校の放送を使い、マップがあることを知らせることや、留学生がどのように感じたのか意見をj得るため、新しく本校に留学してきた生徒にマップを渡すことであ

る。このような意見を踏まえて留学生、在校生にもわかりやすい・伝わりやすい校内マップを作ろうと感じた。

これらの探究を通して、文化の違いというくりは広すぎるので、私たちが探求したこと以外でも、さまざまな機会でも、文化の違いを感じることもある。そして、2009年日本学術協力財団 宮島 喬 著、「特集1◆グローバル化する世界における多文化主義:日本からの視点「多文化共生」の問題と課題ー日本と西欧を視野にー多文化共生していくために」によると、文化の違いから差別につながって、日本では、ブラジル人など製造業に働く者の多くが間接雇用、非正規雇用の下に置かれていること、「研修生」として招かれた中国人などが、実質的に就労し、最低賃金以下の手当に甘んじていることがある。南米人が多く居住し、働いている静岡県浜松市で最近行われた外国人調査では、直接雇用の下にある男性は9%、女性は8%に過ぎず、「派遣・請負」の下にあるという答えがそれぞれ男性は76%、女性は65%に上っていた。この点では十数年来、変化も改善もないあいかわらずの状態が続いている。と、書かれていた。在日外国人の労働問題や、生活習慣、住まいなど、それぞれの異文化を理解しながら共生するというのは、母国人と外国人の両方にとって、困難なことである。社会観の違いはあるとしても、社会の人々ひとりひとりの、それぞれの自己認識が認められることは、非常に重要なことであると思う。ひとりひとりが、人間として重々しい存在という風にみなされ、そのように扱われることは、誰もが求めることであり、多文化共生の社会とは、簡単に言うと、「あたりまえ」があたりまえに存在する社会、ということになると考えた。そして、ニュースや新聞などで、在日外国人の行為が問題化され、警察に通報されたり、問題としてあげられ、多文化共生への反対の声が頻繁に上がっているのをよく見かけるが、多文化共生とは、「寛容」であり、「気遣い」であると考えられる。日本人は「気遣い」を徳行とするので、文化共生の実践は、日本人が大切にしている本質であり、大切に守る必要があると思う。

【参考文献】

国土交通省観光庁 https://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000233.html

外務省 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/summit/ko_2000/commu.html

異文化理解 著者:青木保 岩波新書 刊行日2001年7月19日

福井県多文化共生推進プラン[概要版]

宮島喬 https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/14/12/14_12_12_10/_pdf/-char/ja